



東北復興日記

まだまだ

▶▶▶ 243

ふたば未来学園高校2年

遠藤瞭さん

とが当時の探究テーマとなりました。

私は小学校六年から中学校三年までの四年間、ふるさと創造学に取り組んだわけですが、途中から、あることが心にひっかかっていました。それは、身近な大人も意外と放射線に関連する問題について知らないということでした。

確かに普通に生活していく上で、は知らなくても済むことです。しかし、それで良いのでしょうか。今では考えられないことですが、東日本大震災までは、原子力発電所で事故が起きているなんて、ほとんどの人が考えてもいなかったでしょう。つまり、危険を認知して

議論重ね 科学を身近に

施設の問題について無知でした。自分の町の未来に大きく関わることなのに、自分はそのことを知らない。自分の知らない所で町の未来が決まっていくことに焦りを感じました。そのことから中間貯蔵施設について、果ては放射性廃棄物処分のあり方について考えるこ

いるかどうかで、危機管理の在り方が大きく変わることを、私たちは身をもって体感したわけです。

科学などの難しい情報に私たちはどう向き合っていくべきなのか。そのことについて一月二十八日に、福島県広野町であった「ふくしま学（学）会」で発表し、会場にいる地域住民や専門家の方々と意見交換しました。まずは私たち市民が知ろうとすることが大切。市民側のアプローチだけでなく、専門家も知ってもらおうという姿勢で発信してほしいです。

私はこのような議論を重ねることとて、科学と市民の距離が縮まり、より身近なものとして向き合えると感じました。



よいこと、
ないこと。

ふくしま広野未来創造リサーチセンター

東日本大震災・福島原発事故から3年、フクシマの復興として後の福島復興

「第1回ふくしま学（学）会」で意見を発表する、ふたば未来学園高等学校2年の遠藤瞭さん。福島県広野町で

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。